

# The JEC Times

Special Edition Report on the Spring Program at Lincoln University, New Zealand!



NARA, 25 May 2015

2015年2月20日から3月20日までの1ヶ月間、ニュージーランド南島中部クライストチャーチ市にあるリンカーン大学で短期海外研修を実施しました。本年度は、30名の学生が参加しました。1カ月の研修を経て、学習成果・海外での経験・プログラムの内容・今後の進路への影響など学生の声を集めました。

## ENGLISH LESSONS 学習成果

自分の考えを英語で表現するだけでなく、それをきちんと形式にあてはめて書くことを厳しく求められる授業。毎日のように出されるエッセイの課題や、何度も書き直しを要求されるレポートを辛く感じたこともありました。結果としてまとまりのある英文を書けるようになりました。

リンカーン大学で習ったことを使って話してみたり、ジェスチャーをつけたりすることで、自分の考えが相手に伝わるということがわかり、かたことではあるけれど最終的には会話を楽しめるようになりました。学校で出される課題が多かったのも、一つ一つクリアできるように毎日こなすことでライティングの力も上がったのではないかと思います。スピーキングの授業でみんなの前で英語を話す機会も多く、自分の言いたいことを英語で伝えることのむずかしさを感じました。リンカーン大学では同じクラスに中国人とコロンビア人がおり、その人たちと英語を通して会話をすることで、英語が世界の共通言語であり、大切であるということにより一層感じられました。

実際にリーディングの授業で毎回教えられたのは、ペンを使って重要な部分と知らない単語に印をつけるということでした。こうすることによって後で設問の答えを探しやすくなり、また知らない単語でも読み進めているうちに意味を推測しやすくなりました。また放課後にその日の授業で読んだ文章にもう一度目を通し、分からなかった単語の意味を調べていたので、同時にボキャブラリーも少しは増やすことができたと感じています。

2週間を過ぎたあたりから、最初よりも英語がすつと口から出てくるようになったと感じ始めました。わからないことをホストマザーに質問したり、ニュージーランドでできた友達が使っている表現をまねして意識的に口に出すようにしたり、学校でこなす課題以外にも英語に触れたい一心でしたことが成果として現れたのかなと思いました。



私はクラス分けテストで一番上のクラスに入りました。クラスがわかった瞬間は喜んでいただけ、いざクラスに入ると様々な国籍の学生たちがいて、とても流暢な英語を話していました。こんな中で自分がやっていると不安になりました。初めのうちは宿題の内容も聞き取れず、友達に聞く始末でした。それでも、一日ひとつは自分で努力できたと評価できることをつくりたいと思い、クラスの人に話しかけたり、文法のテストで高得点を目指したりと奮闘しました。宿題は、図書館に残って友達と取り組むことで、疑問点をお互い消化し合いながら取り組みました。一週間もすれば、クラスの雰囲気、授業内容にも慣れてきました。次第に授業も楽しんで参加できるようになりました。特にスピーキングの授業では、一番多様な国籍のクラスだった分、国ごとのいろいろな考え方を学びました。そして、彼らはとてもコミュニケーション能力が高く、引出しをたくさん持っていたので、私にはスピーキング以前にコミュニケーション能力が足りないと感じ、とても刺激を受けました。

授業中、すべてが英語で説明されるという環境を初めて体験しました。注意事項、禁止事項も日本語では話してくれないので集中して聞き取る能力が身に付きました。

英語を書くときのポイントや文章の組み立て方など細かく教えてもらったことで、文章の構成を考えたなら「間違えてもいいからとりあえず書いてみよう」と思えるようになり、課題に取り組むのが楽しくなっていました。

今回最も伸びたと思う能力はスピーキングで、とくに現地の先生方に何度も言われた「言いたいことを日本語から翻訳するのではなく、英語で考えてそれを話す」頭のしくみは1か月で身についたと思う。

## 海外での経験について



### 強

強く印象に残っていることは、学校やホームステイ以外でも人と話す機会がもてたことです。私が友達と2人で観光している最中の雨宿りをしているときに、車いすに乗ったおじいさんとおばあさんと出会い、たくさん話をしました。日本にいた時は、見知らぬ人に話しかけることをしなかったので、勇気を出して話しかけて、楽しく会話できたのがとても嬉しかったです。正直、おじいさんは訛りがすごくてあまり聞き取れなかったし、私たちの英語のレベルも限られているので、意志疎通をはかるのが大変でしたが、相手もすごく楽しそうに話してくれて、とても良い時間が過ごせました。話したのは短い間でしたが、たまたま出会えた人と一生懸命、楽しくおしゃべりできたことが、本当に嬉しかったです。しかし、このような素敵な出会いは、自らアンテナを張って積極的に人と接していけば、どこにいても経験できることだと思います。今回のように自分から積極的に話しかけてみることも大切だと思いました。

### 以

以前テレビで、血洗いのときに洗ったあとの皿を水ですすぐのは日本のような水の豊かな国だけであるというのを見たことがあり知っていたけれど、実際、マザーが泡だらけの皿をそのままにして乾かしているところを見たときは衝撃を受けました。

### 道

道に迷って人に尋ねても何を言っているかわからず、見たこともない慣れない景色のなかでも何とかして家に帰れたことは私の自信になっています。どんな状況におかれても何とかできる、と余裕を持った考え方ができるようになりました。海外で生活することは言語能力に影響を与えるだけでなく、今後の人生の強みになっていくと感じました。

### バ

バスのドライバーがとても優しく、目的地への行き方が分からないときはいつも教えてくれました。それだけでなく、英語をなかなか聞き取れない私にも気さくに話しかけてくれ、会話の練習もでき、バスの移動もとても楽しかったです。

今回の経験で、日本では当たり前のことでもニュージーランドではあてはまらないことが多くて、カルチャーショックをうけました。例えば、バス停に名前がなかったり、風が強いため傘をさす人が少ないこと、裸足で外を歩いている人が多いことなどです。日本にいればあまり意識しないようなところが違うのでおもしろかったです。自分にとっての常識は、他の人にとっての常識ではないのかもしれないと考えるようになりました。

ニュージーランドで印象に残っている経験は、自然を肌で感じたことです。とても美しい国で、真っ青な空と緑のコントラストが素晴らしかったです。また、心と見上げた星空がプラネタリウムのように綺麗で本当に感動しました。

### 二

ニュージーランドに滞在するまで、ニュージーランド人は日本人よりアメリカ人に近いと思っていたが、自己主張より協調性を大事にする日本人と性格がとても似ていた。日本に対して友好的であり、日本語や漫画などの日本文化に興味を持った人や、日本人と結婚している人を多く見かけた。このようなニュージーランドの国民性から、他国と比較して、日本人が非常に生活のしやすい国であると感じた。

### 日

日本では珍しいことに、ニュージーランドでは子供を学校に行かせず家庭で教育を受けさせるという家が少なくありません。日本人の考え方では、学校で社会性を養わなければ協調性が育まれないのでは、と思われがちですが、実際にそういった子供たちを見ていても、協調性に欠けると感じたことは一度もありませんでした。それどころか、とても素直な良い子供たちばかりです。日本人の、「こうあるべきだ」というものは、日本の美学でもありますが、日本の弱点でもあると感じました。それは、「出る杭は打たれる」という諺にも現れていると思います。謙虚さは日本の美学ですが、人に過度に合わせてしまうのは、日本人の弱点です。誰しも譲れないものを持っているはずで、それを主張できることは大切なことだとニュージーランドに来て強く思いました。

### 悲

悲しいことですが、街では人種差別を目にすることもありました。日本では、少なくとも私は日常生活で人種差別を感じたことはなかったので非常にショックでした。1ヶ月という短期間ではありましたが、海外の大学で勉強するということが、海外で生活するということがどのようなものなのか体験することができましたし、このような経験から今まであまり考えてこなかった社会問題にも興味を持つようになりました。





英語学習だけでなく様々なことについて思想の転機になったと思うのは、ベジタリアンやビーガンの人にたくさん出会ったことである。ホストファミリーは全員ベジタリアンで、引率の先生も、大学のクラスの先生もベジタリアンだった。現地で友達になったひとりの女の子は乳製品も食べないビーガンだった。私は元来個人の思想や自由に介入するのを好まないけれど、それは「理解する」のとは少し違っていたと思う。正直にいうと、「そういう人もいるんだ、少し変わっているなあ」と思ってしまっていたと思う。実際にはベジタリアンであるというのは宗教とは違うものの個人の思想や信条の軸であり、だからといって過剰に配慮されるべきでもないという空気感は日本では確実に不十分だと思った。たとえばニュージーランドでは、どのレストランにも大抵ベジタリアン用のメニューがある。しかし日本について考えてみると、わざわざベジタリアン用のメニューがあるところなど簡単には思いつかない。ニュージーランドでは誰かが「私はベジタリアンです」というと、「あら、そうなの！」くらいの反応で終わっていたのも印象的だった。私の叔母はビーガンなのだが、私のニュージーランドでの経験を話すと「『自分の家はビーガンなので』と子供の給食から乳製品を抜いてもらうようお願いしたら、先生たちからものすごく偏見の目で見られるようになった」と話してくれた。ひどい話だと思うものの、ニュージーランドに行く前の自分だったら、先生の気持ちもわかるなあ、と感じていたと思う。日本の徹底した食育、「バランスよく食べることの大切さ」という教育に疑いを持ったことなど一度もなかったが、正しいと信じていたはずのことが誰かを苦しめる結果になっていると気づけたことは自分にとってとても大きかったと思う。

## 派遣プログラムについて

### JAPAN DAY



この派遣プログラム以外では参加できないジャパンデイの来店を行った。日本の文化を現地の人々に紹介するというプログラムであったが、紹介する以上に、ジャパンデイの参加者から日本とニュージーランドの繋がりを学ぶことができ、日本に興味のある現地人と知り合いになるきっかけを与えてくれた。

派遣プログラムで、ジャパンデイに参加しました。私たちは、ステージで日本の今と昔のファッションショーをし、そのあと日本の曲でダンスを披露しました。自分たちの出番が始まる前はチラシをもって、来場してくれたお客様に英語で話しかけ自分たちのショーを見に来てもらえるように声をかけまわりました。あの時の自分は今思うとすごいと自分で自分に感心してしまいます。無我夢中で色々な人に英語で話しかけました。本番は沢山の人の助けもあり大成功しました。沢山のひとと一緒に踊りました。最高の思い出です。

ジャパンデイでは、私は日本の美しい景色を紹介しました。さらに、震災があった東北の風景も紹介しました。来てくださった方は、日本に関心を持っておられる方が多く、紹介した景色を知っているという方も何人かおられました。日本で旅行した時の写真を見せてもらうなど、私たち発表者側も楽しむことができました。ただ説明するだけでなく、現地の人とお話をする中でお互いの日本への思いを語り合えました。東北の写真は、クライストチャーチで地震があったこともありとても共感されていました。実際自分たちが東北に訪問できていたら、もっといろいろなことが語れたのにも思いました。日本人として、日本のことをより深く発信していけるようになりたいと感じました。

今回のプログラムで私が最も良かったなと思っているのは、短期留学したのが現地の大学の中にあるイングリッシュコースだったということです。語学学校が大学の中にあるので現地の大学生と接する機会もあり、またニュージーランドの大学がどのようなものなのか知ることができました。滞在方法がホームステイだったことも良かったと思います。語学学校にいる間は友達との会話は英語のみでしたが、語学学校の友達はもちろんネイティブスピーカーではありません。しかし家に帰ればネイティブスピーカーのホストファミリーと会話することができたため、ネイティブの発音や語句の使い方、日本の学校では勉強しないようなスラングなども勉強することができました。

毎週水曜日の午後には、実際の大学の講義で扱われるような内容の授業（マオリ文化、ニュージーランドにおける観光、クライストチャーチ地震のそれぞれについて）を受ける機会が設けられ、それぞれその分野の教授による80分程の講義に出席しました。話すスピードが速く、ついていくのが大変でしたが、回を重ねるごとにそれにも慣れ、またどれも興味深い内容で、パワーポイントや白板を使った講義はわかりやすく、面白かったです。

中国人やコロンビア人の同級生と難民や教育制度などについて話すスピーキングの授業がとても印象的でした。中国人やコロンビア人、先生の考え方は日本人とは異なっており、違う考えを完全に否定するのではなく受け入れて話し合いお互いのことを知ることの大切さを学びました。

## 今後の進路への影響

何を学んでいて将来はどんな仕事をしたいのか質問されることが多くありました。まだはっきりと将来のことを考えていなくてあいまいな答えしかできない自分が恥ずかしくもあり、将来のことを考えることが多くなりました。ホームステイ先の高校生の男の子はすでに今後の進路を決めており、その話を聞くことができたのもよかったです。ニュージーランドで日本とは違った経験をする中で客観的に今までの自分を見つめることができ、自分には何が向いているのか今後の方向性を少し思い描くことができるようになってきました。また、海外で働くという今まで考えても来なかった考えもニュージーランドに行ったことで出てきました。

リンカーン大学の事務で働いている日本人の方や、ニュージーランドの高校やリンカーン大学、カンタベリー大学に通う日本人の方たちと接したことで、海外で立派に生活している日本人への憧れが強くなりました。将来は海外で暮らしてみたいという気持ちになりました。しかし、今の自分の英語力では海外で暮らすなど到底無理だと痛感したので、今後、更に英語の勉強に励もうと思いました。私は今まで英語の文法やリーディングの勉強ばかりしていたので（それも大切ですが）、これからはスピーキングとヒアリングの能力を伸ばしていけるような勉強をしたいと思います。

学生のうちに長期でなくとももう一度海外に滞在したいという思いが高まりました。それは、語学向上のためだけでなく、現地の人と関わる楽しさを知ったからだと思います。海外に関わらず、人と関わることは本当に貴重なもので、ためらっていたらもったいないのだと実感しました。積極的に人と関わり、いろいろな考え方を知っていくことの重要性を学びました。人と関わる上で重要なのがコミュニケーション能力であることも実感しました。留学生や現地の人と関わる中で、自分の中に引き出しがたくさんあるほど話題も広がっていくと感じ、今後の課題にしていきたいと思いました。

この留学に一回生の今年に参加するかどうか迷っていた時に、今年参加しての来年の英語に対する意識と、一年間日本で勉強してからののでは、どちらの自分が成長できているか考えてみたらどうか、と先生が言ってくださった。そこで今回留学に行くことを決心し帰ってきた今、英語に対する意識はかなり高くなったと実感している。今後、英語でコミュニケーションをとれるようになりたいと、前よりも強く思うようになった。そのために、私の学部の英語の授業は無くなってしまうので新学期からは他学部の英会話の授業を受けてみようと思っている。



## Reflections

ニュージーランド出身の人だけでなく、別の国から移住してきた人や留学に来た人など、様々なバックグラウンドと考え方を持っている人たちに出会い刺激を受けました。日本では非常識だとされている考え方が海外では普通のことであったり、逆に日本人は持っていないような新しい考え方を知ることもでき、視野が広がったと思います。進路を考える上でも、こんな考え方もあるのか、こんな道もあるのかと気づかされるのが非常に多く、そのような刺激を与えてくれた人たちとの出会いが今回のプログラムに参加して本当によかったなと思えることの1つです。

私はジェンダースタディーズを専攻しているのだが、ニュージーランドは世界で一番最初に女性に参政権を与え、今までに女性首相も2人出ている国であること、それでもまだ男女が平等とはいえず、「ガラスの天井」があること…など、ホストマザーやクラスの先生が話してくれたことは、日本に帰ってから大学の友達に何回も話した。大学内でコンドームやアフターピルが買えることも、日本の時代遅れの性教育とは比較にならないほど進んでいると思った。そういう、本で読んでいた知識（各国のジェンダー平等指数をみると日本は格段に遅れていることなど）を実際に体感できたことはとても大きい。

専攻である建築の面では、ニュージーランドの建造物を見学することができた。地震の影響で中に入ることのできない建造物も多数あったが、クライストチャーチには歴史的建造物が建ち並んでおり日本ではあまり見るることのできないゴシック建築も見学することができた。地震から4年経つがあまり建造物の修復が進んでいないことが印象的であった。人口に対して面積が広いという背景からか空間の使い方が非常に上手く、図書館なども仕切りを立てずにプライベートな空間を作り出しているなど、行く先々で魅力的な建造物に出会うことができた。

奈良女子大学国際交流センターNewsletter 特別版  
2015年6月発行 奈良女子大学国際交流センター  
〒630-8506奈良市北魚屋東町  
TEL:0742-20-3736 Email: iec@cc.nara-wu.ac.jp  
\*\*平成26年度グローバル女性人材養成プログラムは、日本学生支援機構「海外留学支援制度(短期派遣)」採択事業です。